

東南アジアの近代地図整備過程における外邦図

小林茂（大阪大・名、大阪観光大）

上田：それでは、小林先生にお願いしたいと思います。簡単に小林先生のプロフィールを紹介します。名古屋で生まれまして、京都大学で勉強なされまして、2003年に京都大学で博士になられておられます。今現在は大阪大学の名誉教授、そして、大阪観光大学の教授という形で後進の指導に当たっておられます。

多くの著作お持ちですけれども、1冊だけ挙げますと、『外邦図—帝国日本のアジア地図』（中公新書、2011年）というタイトルの本があります。これを読みますと、外邦図の形成のプロセス、そして、今現在、どこに収蔵されて、どのようにそれが管理され、利用されているのかということの全体像を把握することができます。それでは、小林先生よろしくお願いしたいと思います。

小林：ご紹介いただきました小林です。今日は「東南アジアの近代地図整備過程における外邦図」という題で、中公新書に書きましたことを主体にしながらも、もう一歩進んだ話をさせていたいただきたいと思います。

外邦図とは

まず、外邦図とはどんなものか、ということから始めます。外邦図は日本軍が作製したアジア太平洋地域の地図というのが基本的な理解です。これにはまず日本軍が測量し、あるいは空撮して作った地図というのがあります。もう1つが、外国製の地図を日本軍が改変しつつ複製したものとなります。地図を作るには時間がかかりますので、出来合いのものがあれば、著作権などお構いなしに利用するわけです。両者合わせてどれくらいあるのかというと、少なくとも2万数千種類はあります。こういうものの研究というのはとてもなかなか個人ではできませんで、実際は外邦図研究会を組織して、関心のある方のお知恵を集約してきました。私のあとに海図について講演される今井先生とも、この研究会でお知り合いになりました。

なお外邦図には、日本軍が作った図の他にもう1つ、日本の植民地政府が作製した、台湾や朝鮮半島、関東州の地図（地形図）もあるということに触れておかねばなりません。関東州というのは旅順、大連の辺りですね。また樺太は、植民地政府の作ったものではなく、陸軍に属した測量機関である陸地測量部がやはり地図（地形図）を作っております。ともあれこれらは、作製当時対象地域が国内であったため、もともとは外邦図ではありませんでした。ただし、今ではこういうものも合わせて外邦図ということになってきております。私は日本軍が作製した「狭義の外邦図」に対して、植民地政府作製の地図を「広義の外邦図」と言うことにしています。

こうした外邦図について、今まで研究から分かり始めたことをご報告したいと思います。またここでは陸軍が何をやったかという話を主にさせていただきます。

海外所在の外邦図

さて、外邦図の現在の理解にむけて、その現存状況についてつぎにお話しします。これについては、現在も材料が少なくて十分な紹介ができないのですが、無理を承知で考えてみます。

第二次世界大戦が終了して、戦争そのものだけでなく、日本軍の占領地の軍政や植民地統治も終了します。そのときに、日本軍により外邦図や空中写真が大量に焼却されまし

た。当時、地図作製の中心であった陸地測量部は長野県に疎開しており、関係者にお聞きすると、8月15日に戦争が終わって、翌日から毎日毎日地図を焼却したということです。当時は軍用地図の印刷業務が増大して、陸地測量部だけではカバーできないので、民間にかなり下請けに出しておりました。その工場のあった東京でも地図の焼却が盛んに行われました。外地にいた地図作製機関も同様で、満州にいた測量技術者たちは、ソ連軍が攻めてくるので地図を燃やして、そして大事な測量や製図の機材、とくにレンズを持ち出して逃げたのですけども、もうそれも持ちきれなくなって、土の中に埋めてさらに逃げたという話があります。

それで、かなりの外邦図とか空中写真が燃やされてしまっていますが、その後、アメリカ軍による接收が行われました。長野県に疎開中の陸地測量部で、測量原図に当たるものは全部接收するという原則で徹底的に行われました。あとからお話ししますように、このときに接收された地図の最大の収蔵機関は、現在アメリカ議会図書館となっています。このコレクションには、明治期の1880年代に中国大陸や朝鮮半島で日本軍将校が旅行しつつ作製した手描きの地図が数百枚あります。これをみて、こんな古いものまで接收したのか、とあきれます。

接收された地図と空中写真はアメリカ陸軍地図局（Army Map Service）に移されて利用されることになったわけですけども、今から考えれば、第二次世界大戦が終わって、ソ連との対立が予想され、さらに中国での国民党と共産党の内戦の成り行きも注目されていたろうと思います。このために、日本の外邦図は役立つと考えられたと推定されます。

なお日本軍撮影の空中写真の行き先について触れておきますと、プリント写真が少しアメリカ議会図書館にあります。ネガのロールはアメリカ国立公文書館（NARA）に収蔵されています。ただし、日本の降伏からアメリカ軍の進駐までかなり時間がたったためか、かなりが焼却されたと考えられ、あとからお話しするようにアメリカ国立公文書館に残っているものは多くありません。

これに関連して、やはり戦敗国であるドイツの場合が気にかかります。ドイツの場合は、空中写真を真っ先に接收しています。第二次世界大戦中にドイツが写した空中写真にはソ連側が写っているものが多かったからと考えられますが、これらは1990年代まで秘密にしてNATOが利用することになりました。

接收した地図は必要に応じてアメリカ陸軍地図局が利用したと考えられます。朝鮮戦争に際して初期に使われた地図には、それを明確に示すものがあります。さらにアメリカ軍は、原版の残っているものを日本側に複製させてアメリカ側に納めるようにさせています。戦後に印刷された外邦図があることが指摘されていますが、それにはこうした背景があります。

ところで最近、アメリカ陸軍地図局のブランチが新宿の伊勢丹ビルにあったことが注目されるようになりました。そんなところで軍用地図を作っていたとは、と驚いた方たちが調べています。とくに朝鮮戦争に際しては、伊勢丹ビルで地図をたくさん作っていたわけです。アメリカ陸軍地図局の第二次世界大戦後の地図作製は、日本については沖縄に集中していますが、東アジアでは中国大陸の沿岸部にも多いことが注目されます。

そうしたことが進行する一方で、アメリカ陸軍地図局では戦中期に印刷した地図が大量に余るという事態が発生しました。1941年以降、それを有力大学とか図書館に配布いたします。これにあわせて、ドイツや日本で接收した地図も配布されたことになるわけです。そこで今日お配りしました、『外邦図研究ニューズレター』の9号（2012年3月刊）をご覧ください。このニューズレターは、科学研究費や民間からの研究費によって刊行してきたもので、初めは3号雑誌になると思っていましたが、おかげで何とか続いてまいりました。この67頁以降に、Captured Mapと呼ばれる、ドイツと日本から接收した地図を配布した機関のリスト（1950年）を掲載しています。原本の画像をアメリカの大学

のライブラリアンから提供していただきました。カリフォルニア州の場合、カリフォルニア大学のバークレー校やスタンフォード大学のHoover Libraryといった有力大学や図書館に配布され、現在もなお大事に保存してくれています¹。



写真1 アメリカ議会図書館（ジェファーソン館）

この配布の中心になりましたのが、先ほどからたびたび名前が出てきているアメリカ議会図書館です。アメリカ議会のすぐ横にあり、日本の国立国会図書館のモデルになった図書館で、世界最大と言われています、そ

の地理・地図部がこれを担当したわけです。手描き図のような一部しかないものはアメリカ議会図書館が収蔵することにして、複数あるものを各地の大学や図書館に配布したようです。アメリカ議会図書館というと、いろいろな分野の日本の研究者が資料調査にきていますが、その対象は書物でした。地図についての本格調査はまだ始まったところで、これから大きな発見があると期待しています（写真1）。

さて、アメリカにおける外邦図の所在はこうしてわかりかけてきましたが、さらに中国やロシアの機関でも終戦時に全部処理できなかった地図や空中写真を収蔵している可能性が極めて高いと推定しています。大連の図書館には日本が作製した中国大陸の地図だけでなく、空中写真も相当あるような情報を聞いております。ただし現在の中国では、おそらく軍事的な理由で、大縮尺の地図を固く秘密にしていますので、参照どころか所在も確認できません。

なおオーストラリアの国立戦争記念館が戦争中に現場で接収した日本軍の地図を収蔵していることは、田中宏巳防衛大学校名誉教授の作製した同館の日本陸海軍資料の目録からわかります。

外邦図はもちろんイギリスにもありますが、ともあれアメリカ議会図書館のものが最大で、日本にない外邦図もある可能性が高いというわけです。外邦図研究では、科研費が取れた2002年から共同研究者が調査を開始いたしました。これまで手描きのものも含めて重要な外邦図を大量に収蔵していることがわかってきました。

アメリカ議会図書館所蔵の外邦図は本格的な目録を全部作ろうと思ったら、2～3人の研究者が1年間ぐらいかけないと無理だろうと思います。2002年に調査した久武哲也さん（故人、甲南大学教授）や今里悟之さん（現九州大学）の短期間の調査で、それぐらいの量があることがわかっています。

私がアメリカ議会図書館に行き始めたのは2007年ですが、それからの調査で先ほど触れた陸軍将校たちの手描き図のほか、「旅順要塞砲台図」と呼んでいるやはり手描きの地図を発見しました。日露戦争の旅順包囲戦でロシア側の降伏のあと、現場に派遣されていた測量技術者にロシア側の陣地を測図させたわけです。写真2は東鶏冠山北堡壘という激戦が行われたところで、精密に等高線も入れて描いています。まわりの穴は砲弾の破裂した跡です。堡壘の壁が乱れていますのは、日本軍が塹壕やトンネルを掘って接近し、爆薬を

1. この記事は下記のURLで参照可能。

http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/newsletter9/pdf/n9_s5.pdf

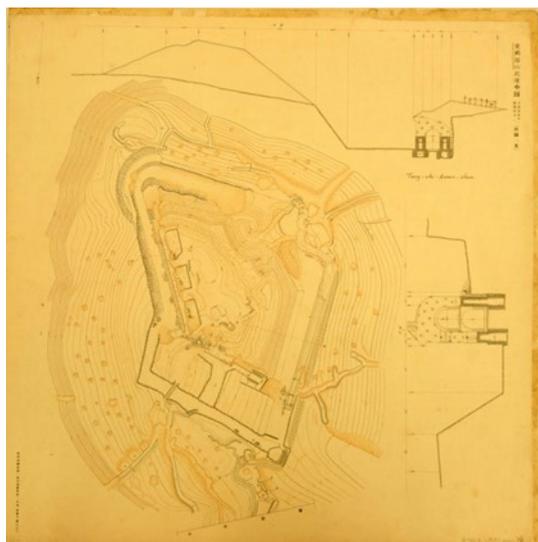


写真2 アメリカ議会図書館蔵
「東鷄冠山北堡壘圖」(1905年)



写真3 アメリカ議会図書館マディソン館地下
地理地図部書庫

仕掛けて、爆破したからです。これと同じような地図は、参謀本部が公開した『日露戦史』にも収録されていますが、破壊される前の状態を示しています。塹壕の位置や破壊された状態は、軍事秘密として公開されなかったのではないかなと思います。こんな日露戦争のときの旅順の砲台図が全部で100枚ほどあります。アメリカ軍はこれも原図として接收したわけです。

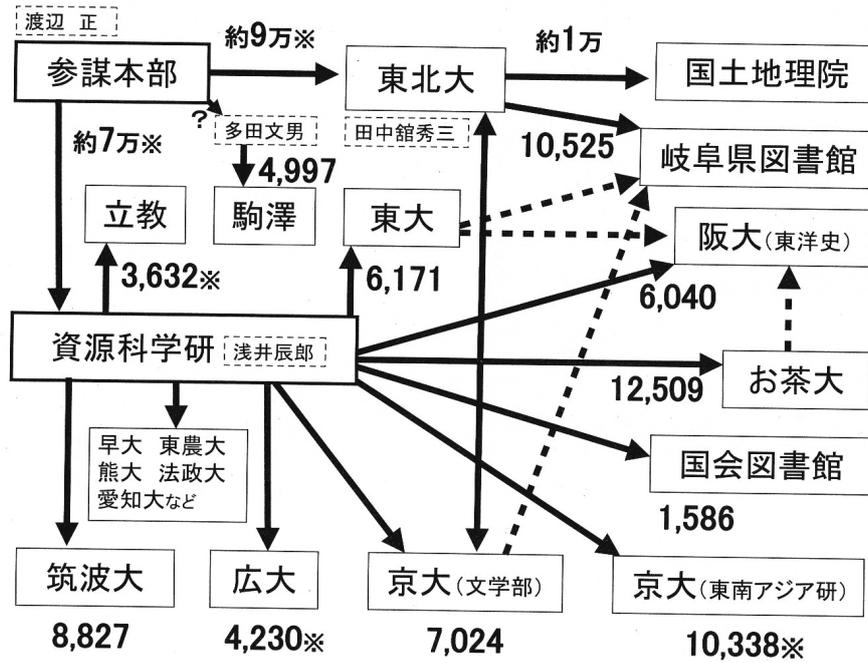
それから、写真3はアメリカ議会図書館の地理地図部の書庫です。サッカー場が2面ぐらい取れるところに地図ケースがずらりと並んでいて驚きます。アメリカは第二次世界大戦まであまり地図を熱心に収集していなかったようですが、第二次世界大戦では特に太平洋戦線では非常に地図が少なかったため、地図の集積を図りました。それが最終的に、議会図書館に運ばれて、こういう書庫ができていったということになります。

なお、ハーバード大学とか、カリフォルニア大学のバークレー校、ウィスコンシン大学などが外邦図を持っていて、その調査が必要なのですが、基本的には議会図書館とおなじようなものがあると考えています。なおスタンフォード大学のコレクションについては、現在、台湾の中央研究院の范毅軍先生が代表者を務めておられる組織と一緒にデジタル化を開始しています。范先生のグループには長期的に安定した財源があり、私たちの研究が、申請しても採択されないことがしばしばある科学研究費によっているのと対照的です。スタンフォード大学には1万枚ぐらい外邦図があるということで、これを全部デジタル化されたら、われわれが公開している外邦図デジタルアーカイブの強敵になるだろうと思います。

それから、シカゴ大学では外邦図を含む世界各地の近代地図の索引図を作っております。日本の外邦図も一部分、索引図が入っています。「西伯利兵要二十万分一圖」の索引図を公開しているわけです。ともあれ海外でも外邦図に注目する図書館が幾つか現れていることがわかっていただけだと思います。

国内の機関の収蔵する外邦図

海外にある外邦図に対して、日本に残った外邦図にはどんなものがあるかと言いますと、最大のコレクションは第二次世界大戦後、陸地測量部にあったものが地理調査所(国土地理院の前身)にうけつがれ、さらに現在は自衛隊地理情報隊(立川)が保管しているものです。全部で2万3,000種類の初刷り図を持っています。各1点ずつで、だから2万3,000点というわけですね。



図II-1-1 資源科学研究所からの外邦図の分配経路

注：実線矢印は現物の分配もしくは移管（図幅の一部に複製が含まれる場合がある）、破線矢印は複製（コピーまたはマイクロフィルム）による分配であることを示す。数字は同一図幅の重複を含めた延べ枚数。※は正確な数値が未確定のもの。本図は資源科学研究所からの分配経路の概要であり、参謀本部からの流出経路のすべて、あるいは日本国内の外邦図の現存状況のすべてを表わしたのではない。
資料：浅井文書ほか。

図1 参謀本部から大学関係者によって持ち出された外邦図の配布ルート

〔久武哲也・今里悟之「日本及び海外における外邦図の所在状況と系譜関係」
小林茂編2009『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会〕

他方、第二次世界大戦終結時に参謀本部にあった地図の一部が大学関係者に持ち出され、現在は立教大学をふくむいくつかの大学に収蔵されています（図1）。この経緯はつぎにお話ししますが、大学にある外邦図は全部で1万5,000種類ぐらいです。それから、地図の数からいうと、東北大学というのに来たものだけで10万枚あったということで、全部で十数万枚はあると考えられます。

外邦図が大学に収蔵された経緯については、第二次世界大戦の末期に、参謀本部でおこなわれた「兵要地理調査研究会」から説明せねばなりません。渡辺正さんという大本営参謀（当時陸軍少佐）が、多田文男（1900-1978）という当時東大助教授に声をかけて始めたのが兵要地理調査研究会で、アメリカ軍が日本本土を攻撃する場合にどうなるだろうかという関心から地理学者を集めて検討したわけです。例えばアメリカ軍はどこに上陸してくるだろうかとか、それから、アメリカ軍が本土を分断して占領したときに、どういうふうにいるんなものを配置したらいいかとかをテーマとしました。そのときの地理学者の代表が多田先生だったわけです。上陸地点の場合、それに適した砂浜の海岸を特定する必要があります、自然地理学の知識が必要になります。

写真4は、2003年11月に駒澤大学で開いた外邦図研究会のときに撮影したものです。多田文男先生はもう亡くなって写っていないのですが、左から三人目の方が大本営参謀だった渡辺正さん（1916-2013）です。お宅に伺ってお話を聞きました。大本営参謀という立場から、終戦前後の参謀本部について俯瞰的にいろいろ教えていただきました。渡辺さんが保存してこられたに関連する資料は『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵史



写真4 外邦図の保存に努力された方々

前列左から佐藤久、浅井辰郎、渡辺正、中野尊正、三井嘉都夫、坂戸直輝、
後列左から高木勲、金窪敏知（敬称略）〔2003年11月8日、駒澤大学にて撮影〕

料集』として刊行しました²。

この研究会の活動は学者の戦争協力といわれるかもしれませんが、アメリカとかイギリスでは、ノルマンディー上陸作戦の場合をはじめとして、有名な地理学者も参加して、技術や知識の提供を盛んに行っています。これと比較すると、日本の場合は戦争末期になって、少しだけやったということになるかと思えます。

写真4に戻りますと、渡辺さんの右側が都立大学名誉教授の中野尊正先生（1920-2010）、さらに右側が法政大学名誉教授の三井嘉都夫先生（1922-2011）で、いずれも多田先生のお弟子さんです。終戦直後に渡辺さんから多田先生に参謀本部の外邦図はこのままにしておくとなってしまうので学術用に持ち出したらどうかという連絡があって、九州と愛知県からそれぞれ復員されたばかりの中野先生と三井先生が、多田先生の指示をうけて市ヶ谷の参謀本部に行って外邦図を担ぎ出したわけです。1945年の9月末～10月はじめの頃です。持ち出した外邦図は、女学校などに隠して点々と移動しましたが、最終的に資源科学研究所（新宿区百人町）に落ち着きます。資源科学研究所は日本の第二次世界大戦参戦とともにできた自然科学系の研究所です。立教大学に収蔵されている外邦図もそのときに持ち出されたものです。

写真4には他にも重要な方が写っていますので、紹介しますと、右端は水路部（現海上保安庁海洋情報部）におられた坂戸直輝さん（1911-2004）です。戦中にシンガポールで大量に接收したイギリス海図を分類整理するなどされました。左端が、東大名誉教授の佐藤久先生（1920-）です。兵要地理調査研究会の一番若いメンバーとして活動されました。佐藤先生の右が浅井辰郎先生（1914-2006）で、つぎに詳しくお話をさせていただきます。

参謀本部にあった外邦図は資源科学研究所に集積されたわけですが、そこに浅井先生が抑留されていたソ連から帰国します。浅井先生は京大の地理を1939年に卒業して、満州建国大学に赴任します。1941年には今西錦司のポナペ島の調査にも参加しました。浅井先生の父親は浅井治平という有名な中学校の地理の教師で、東大でも勉強したことがあり、多田先生の友人でした。浅井先生が抑留から帰国されて資源科学研究所に勤務したのは、そ

2. この資料集（渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編、2005年3月大阪大学文学研究科人文地理学教室刊、口絵4頁+v+124頁）は下記のURLで閲覧できる。
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/watanabe/>

うした経緯もあったのではないかと想像しています。

浅井先生は資源科学研究所にあった外邦図を分類整理します。そして、分類した外邦図をいろいろな大学に配分するという大事な仕事をしました。図1にはそれが示されています。私の勤務していた大阪大学も6,040枚とたくさんの外邦図をもらっていることになっていますが、実は同じものがたくさん入っていて、分類整理するとそんなに大きなコレクションにはなりません。なお、この資源科学研究所へのルートのほかにも、もう一つ東北大学のルートもあり、そこから外邦図を配分された機関もあります。

立教大学の外邦図コレクション

そこで、立教大学の外邦図コレクションに関連して別技篤彦（べつきあつひこ）先生（1908-1997）の役割を紹介することになります。別技先生は、浅井先生よりも前に京大の地理を卒業し、大阪商科大学（現大阪市立大学）の予科に勤めたあと、1941年に陸軍嘱託としてジャワに赴任いたします。そこで司政官として活動し、ある図書館に南方文化研究室というのをつくっていたということです。また一時期は女学校で教えていたようです。

2人は、満州やジャワに行く前には、ともに日本地政学を標榜した「総合地理研究会」のメンバーでした。当時、参謀本部員だった高嶋辰彦という高級将校が関西財界から資金を得て、「皇戦会」という団体を組織していました。高嶋は総力戦のなかで思想戦が大事だと主張して、小牧実繁という京大の地理の教授が主宰する総合地理研究会という組織に資金援助をしていました³。

小牧教授はもともと神主さんで、日本を特別な国として地政学を考えた人です。彼の地政学はこのために日本地政学とか皇道地政学と呼ばれます。とくに戦時下の時流に乗って、そういう地政学に関するイデオロギー的なエッセイをいろんな雑誌に書きまくりました。戦後は公職追放になります。

総合地理研究会の考え方は、欧米によるアジアの植民地化を批判しつつ、日本がそれに代わる新しい秩序をつくるに際し研究が必要だということで、世界各地の地理の本を書くわけですが、別技先生はそのときにオランダ領東インドを担当し、『蘭領印度』という本を刊行します（1941年）。ただし当時まだ別技先生には現地経験がなかったと思います。いろいろ勉強して、その頃からラッフルズに注目されていたようです。しかし、この本には参考にした文献が挙がっていません。恐らくそれを示すと、欧米を批判しているにもかかわらず、欧米の成果に基づいて書いた、とされるから載せなかったと推測しています。この点は、同じシリーズの刊行で、私が見ることができた本でも同様です。

浅井先生と別技先生が戦時に国内で総合地理研究会の活動をしていたら、終戦後ともに公職追放になった可能性が大きいと思います。浅井先生はソ連に抑留されて、帰国して資源研に就職します。それで資源研の地下室で埃をかぶっていたたくさんの外邦図を見て、これを何とかしなくちゃいけないということで、分類整理されているいろんな大学に配布したわけです。この浅井先生の活動には、多田先生のアドバイスもありました。

図1に示した資源研から始まるルートというのは、現在立教大学に収蔵されているものも含めて、浅井先生が整理を手掛けられたということになります。

どのような経緯で外邦図が立教大学に入ったかについては、すでに『立教大学所蔵外邦図目録』の冒頭に豊田先生が概要を書いておられますが、昨日調べてもう少し詳しいことがわかりましたのでご紹介します。1958年に科学研究費総合研究「アジア地域の社会経済構造」が5年間交付されることになり、人文社会科学の各分野がテーマと拠点を設定して

3. この研究会については、小林茂・鳴海邦匡・波江彰彦編2010.『日本地政学の組織と活動：総合地理研究会と皇戦会』大阪大学文学研究科人文地理学教室を参照。

そこに配分されたわけです。「アジア地域の法」（東大法学部）、「東南アジア地域の経済」（一橋大学経済研究所）、「アジア地域の政治」（中国研究所・愛知大学国際問題研究所）、「インド及び東南アジア地域の社会」（東大東洋文化研究所、東大教育学部、東洋文庫、東大文学部）、「インド及び西南アジア社会の思想的背景」（京都大学人文科学研究所・京大文学部）のほかに、立教大学文学部が拠点になって「東南アジア地域の地理」というテーマを担当することになりました。各機関にはアジア地域総合研究施設をおき、科研費の受け皿にするわけですが、立教大学では別枝先生がこの代表者になりました。別枝先生は、戦時とはいえ現地滞在の経験のある東南アジア研究者として指名されたのだと思います。この科研費で支出できるのは図書や資料の購入費だけで、これを拠点に備えて共同利用するという枠組みです。購入する図書や資料の選択は、日本地理学会と立教大学が相談して決めるということになっていました。1958年度の研究費は全体で1,000万円、地理学分野への配分は120万円だったということです。外邦図は1959年と60年に1枚150円という値段で購入しています。このお金は地図を整理するアルバイト料とか、資源科学研究所が解散するときの職員の退職金にもなったとのこと。この研究所は文部省の機関としてできたのですが、戦後は民間組織で資金が少なかったようです。

さて東南アジア研究者の別枝先生はどんなふうに外邦図を利用されたのか、すこし調べてみました。別枝先生の学位論文になった『東南アジア諸島の居住と開発』という書物では、いろいろな地域の例を挙げながら、オランダ製の地図（ただしそれを元図とする外邦図）のどれに当たるか縮尺も含めて書いています。『季刊民族学』（国立民族学博物館）6号（1978年）掲載の「中部ジャワ 自然村の生活」というエッセイでは、Merapi山の南方の村の説明に地図の画像を使っています。オランダが作った元図はカラフルな図で、外邦図では印刷に際し色の数をすこし減らしますが、非常にきれいにディプリケートしております。

外邦図の目録

なお大学に配布された外邦図については、1970年代から80年代にかけて、阪大の布目潮瀧（ぬのめちょうふう）という東洋史の先生たちが、写真を撮影しながら検討して『中国本土地図目録』というのを作りました。東洋史の研究者の間では、今でもよく使われていると思います。

これより遅れますが、大きなコレクションを収蔵する大学では徐々に目録が作製されて、1990年代後半には東北大と京大の間でお互いに不足する地図（コピーも含む）の交換が行われます。そして2000年代になってからさらに研究を推進することになって、東北大がまず目録を刊行し、それに京大、お茶大、さらに駒沢大、立教大が続きました。今では5つの大学について外邦図のカタログが整備されたわけです。

目録ができるということになってきます。とくに重要なのは、大学にある外邦図には明治までさかのぼるものは少なく、時代が下がるものが多いという点です。大学の外邦図は基本的に終戦時に参謀本部にあった地図ですから、当時日本陸軍が使用する可能性があった地図ということになります。したがって、新しい地図でカバーできる地域については、古い地図は除かれてしまっていたわけです。

もう一つは第二次世界大戦時の戦線の広がりを反映して、カバーする範囲が非常に広い。アリューシャン列島からハワイ、オーストラリア、インド、シベリアにまで及びます。新たにカバーされるようになった地域については、元図が外国製の地図の場合が多くなります（欧米諸国の植民地政府製の地図もふくむ）。すでに多くの地域で近代地図が整備されていますので、これを利用しました。

第二次世界大戦参戦直前の東南アジアの外邦図

それでは東南アジアをカバーする外邦図がどれぐらいあったのかという点が注目されます。**写真5**は1941年の10月調べの『南方地区地図製図目録』の索引図です。日本の第二次世界大戦参戦直前の地図の整備状況を示しています。この図で赤い枠で囲ったところは10万分の1以上の大縮尺の地図があったことを示しています。戦闘に使うということになるとやはり5万分の1か、2万5,000分の1ぐらいが適当で、10万分の1というとかなり使いづらいと思います。そうした地図がこの程度しかなかったわけです。

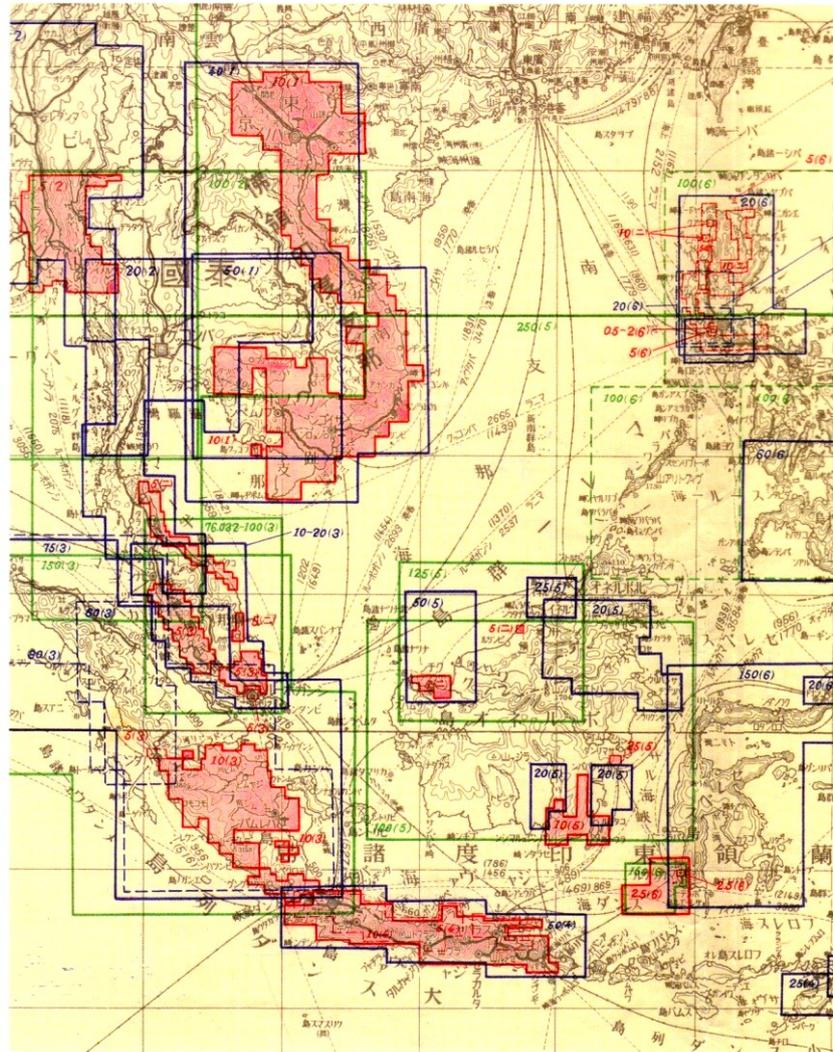


写真5 1941年10月調べの『南方地区地図製図目録』の索引図

こうした東南アジア地域をカバーする外邦図の元図になる外国製図を、どのようにして調達したかが気にかかります。日本軍は、第二次世界大戦前にはあまり東南アジアに関心がなかったと考えられます。日中戦争で蒋介石の政権が内陸部に移動し、それに物資を送る「援蒋ルート」を封鎖するために、だんだん東南アジアに深入りしていくようなところがあります。

それで、例えばオランダ領東インドの場合は地図がないので、1939年に在英大使館を経由して在オランダ公使館の外交官と駐在武官の協力を得て、帝国大学に地図学研究所をつくるので地図を提供してほしいとオランダ側に依頼して入手したことがわかっています。今のところ、東南アジアの地図の入手経路がはっきり分かっているのはこれだけで、仏領インドシナについては、北部仏印進駐以後に入手したのではないかと思います。マレー半島やビルマ、フィリピンの外邦図の元図の入手経路も分かっていないのですが、日本が東南アジアに関連して作った外邦図は、欧米列強の植民地における地図作製に完全に依存していたということにははっきりしています。今回お送りいただいた立教大学の目録を拝見して、あらためてこれを確認しました。

欧米諸国による東アジアの地図作製

このような欧米列強の植民地における地図作製についてお話しする前に、近代になって欧米諸国がどんなふうアジア地域で地図を作ってきたかについて少しだけお話をしたい

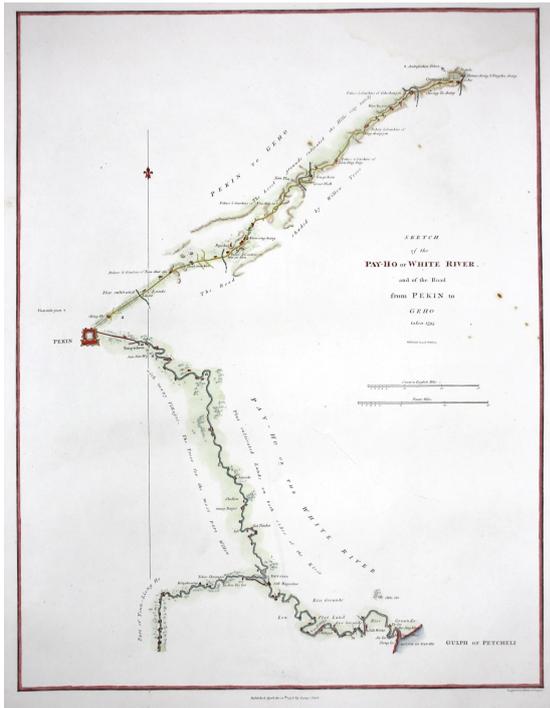


写真6 George Stauntonによる
マカートニー使節団報告書(1798年)より
左中央の朱色が北京

と思います。今のところ、東アジアについてしかお話ができないのですが、欧米諸国が近代地図を作り始めたというのは、マカートニーの使節団(1797年)以後ですね。マカートニーは中国に来て、北京を經由して承德まで行き晩年の乾隆帝に会います。この使節団の報告書ではそのルートの地図を掲載しています(写真6)。

渤海湾から中国船に乗り換えて、Pei Ho(北河:白河:海河)をさかのぼって通州まで行き、あとは陸路で北京、さらに承德まで行くわけです。この図はコンパスと時計で作った地図だと思います。コンパスで方位をはかり、乗り物の速度に時計で測った進行時間を掛けて距離をもとめて作図すれば地図ができるというわけです。中国の奥地まで深々と入っていき、万里の長城を越えるときには詳しい調査をしています。長城の断面図までも報告書に出てきます。

欧米の地図作製では、こうした外交団がおこなう測量がまずあり、随伴した軍人が担当しています。日本にきたペリーの使節団もあちこち測量しています。

つぎに戦時測量とでも呼べるものがあります。

戦争になったときに兵隊に測量させるというのは、アヘン戦争以後、アロー戦争、清仏戦争などで確認できます。アロー戦争のときには、渤海湾から北京までの4枚セットの地図をつくっています。このときはイギリスの測量隊に台湾で領事をしていたSwinhoeという動物学者が通訳として参加して記録を残しています。清仏戦争に際しては、フランスが台湾の基隆(キールン)の港の図も作っています。海の水深も書いています。こういう戦時測量というのは日本も日清戦争のときに大規模に実施します。

それから、開国以後は領事が測量する場合があります。台湾の地図を作ったSwinhoeのほかには知られているのはアメリカの厦門(アモイ)領事であったLe Gendreです。自身で探検旅行して、立派な台湾の地図を作っています。当時台湾の東海岸に漂着したアメリカ人が先住民に殺されるという事態が発生しており、Le Gendreはこれに抗議しますが、清国側はこの図に描かれた台湾の真ん中を南北に走る太い線から東側は、野蛮な「化外の民」が住んでいると主張します。これに対してLe Gendreは、清朝のコントロールが及んでいないこの線の東側は清朝の領土ではないと主張します。たまたまその頃に琉球の宮古島民がこの地域に漂着し、その多くが先住民に殺されました。彼は、本来であれば保護すべき漂流民の殺害行為に対する懲罰行動は国際法的に見て合法というアドバイスを日本政府にして、台湾出兵(1874年)が行われるに至ります。Le Gendreは顧問として日本政府に雇われ、日本軍が上陸した台湾南部の図も提供しています。日本にとっても重要な意義を持つ台湾の地図がアメリカの領事によって作られたというのは、なかなか興味深い点です。

さらに規模は小さいのですが、キリスト教のミSSIONナリーも測量を行い、地図を作製しています。

植民地での本格的な地図作製

以上のような地図作製のあとに、植民地での本格測量による地図作製ということになります。東アジアの場合は、日本以外ではドイツが青島(チンタオ)で作りました。また関

東州ではロシアが、日露戦争まで地図を作っています。青島の場合とはちがい、ロシアはより本格的な三角測量を実施します。その後、日本が台湾や朝鮮半島、関東州で三角測量による地図作製を実施します。

つぎに東南アジアの欧米の植民地で地図作製がどのように行われたという点が気にかかります。これを調べているところですが、分かってないことが多いと思います。オランダ領東インドの場合は、**Topografische Dienst**という地形測量局が担当していました。この活動について一番勉強になったのは、日本軍が1942年に進駐して、この機関を占領し、日本の測量技術者がそこにあった資料を翻訳したものです。オランダ植民地時代の測量がどういふものだったのかを示しています⁴。それを見るとオランダは、初期に三角測量をスムーズに実施できず、苦勞したことが分かります。なおオランダ領東インドの地図では、本初子午線をバタビアとかパダンを通過する子午線としています。つまりバタビアやスマトラのパダンを経度0°にする地図を作っています。

フランス領インドシナの地図になると、本初子午線がパリになっています。また角度がグランド表示になっているというのが大きな特色です。**Service Géographique de l'Indochine**という測量機関が1899年から活動しますが、その前から参謀本部の陸地測量部みたいところが地図を作製しています。

マレー半島についてはマレー連合州測量局 (**The Federated Malay States Survey Department**) 以外にもインド測量局 (**The Survey of India**) などが地図作製に関与していたようです。

ビルマやインドについてはインド測量局が担当していて、**Matthew Edney**という地理学者が、*Mapping an Empire*という本を刊行して(1997年)、インドでの測量の初期がよくわかってきています。インド測量局については他にも研究書がありますが、それ以外の地域についてはそうした本がほとんどないという状態です。

フィリピンはアメリカ海軍の**The Bureau of Coast and Geodetic Survey**などが担当していましたが、内陸部の本格測量は進んでいなかったようです。フィリピンについても、戦中に現地で測量を担当した日本人技術者の報告が役に立ちます。

東南アジアに関する日本の外邦図は、欧米植民地の大半の地域については、その地図作製機関による大縮尺図が整備されていたものを複製しています。こうした点からすると、東南アジアに関する外邦図は1940年代前半までのこの地域の地図のコレクションと評価できると思います。外国製の地図をディプリケートしたのですが、外邦図にはどの作製機関が作ったとか、測図や製版の時期に関するデータをしっかり記載されています。したがって、これに類する地図のコレクションはアメリカの議会図書館に行けばあるかもしれませんが、東南アジアやヨーロッパ諸国には匹敵するものがないということになります。

日本軍撮影の空中写真

これに加えて、日本軍は空中写真も撮っています。日本軍が撮った空中写真の探索はいへんですが、ともあれ空中写真で作った外邦図がかなりあるわけですね。「空中写真要図」という注記があり、簡単に識別できます。もちろん立教大学にもあります。

こうした「空中写真要図」がどの範囲カバーしているのか、という観点から作ったのが**図2**です。樺太や山東省、黄河流域やフィリピンといろいろなところについて作っているのですが、結局既存の地図がなかったところについて空中写真を使った地図を作っていることがわかります。スマトラとかジャワのような地図が整備されていた地域については、

4. 現地に進駐した日本人測量技術者の報告は、小林茂・渡辺理絵解説2011.『研究集録地図』不二出版(全3巻)に集録されている。

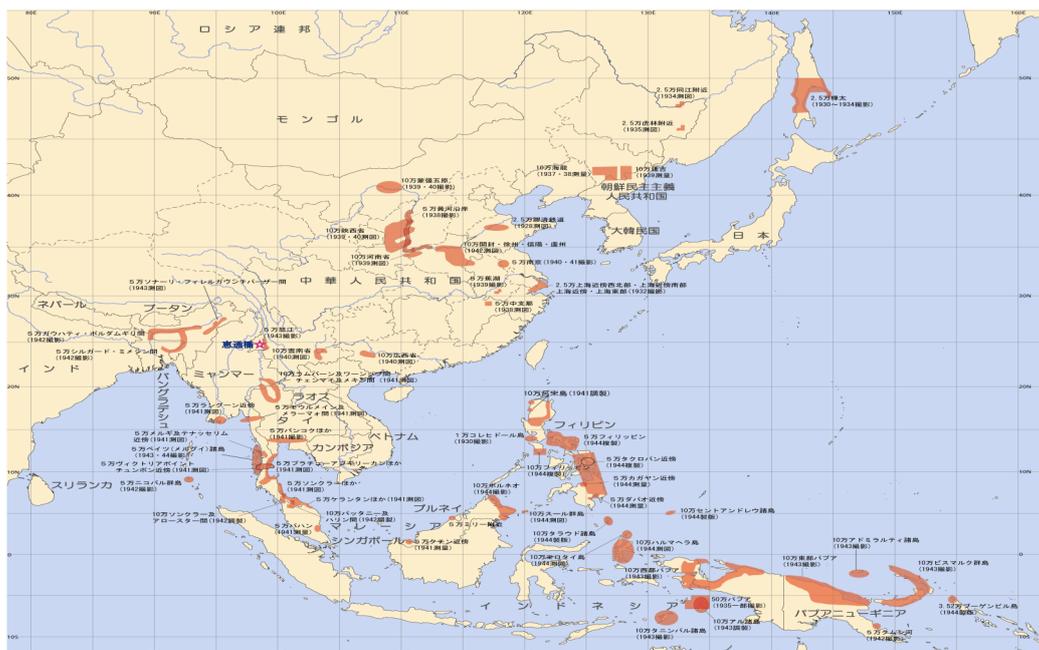


図2 空中写真による日本軍作製地図のカバー範囲

〔小林茂・渡辺理絵・鳴海邦匡〕

「アジア太平洋地域における旧日本軍および関係機関の空中写真による地図作製」
小林茂編2009『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会 所収〕

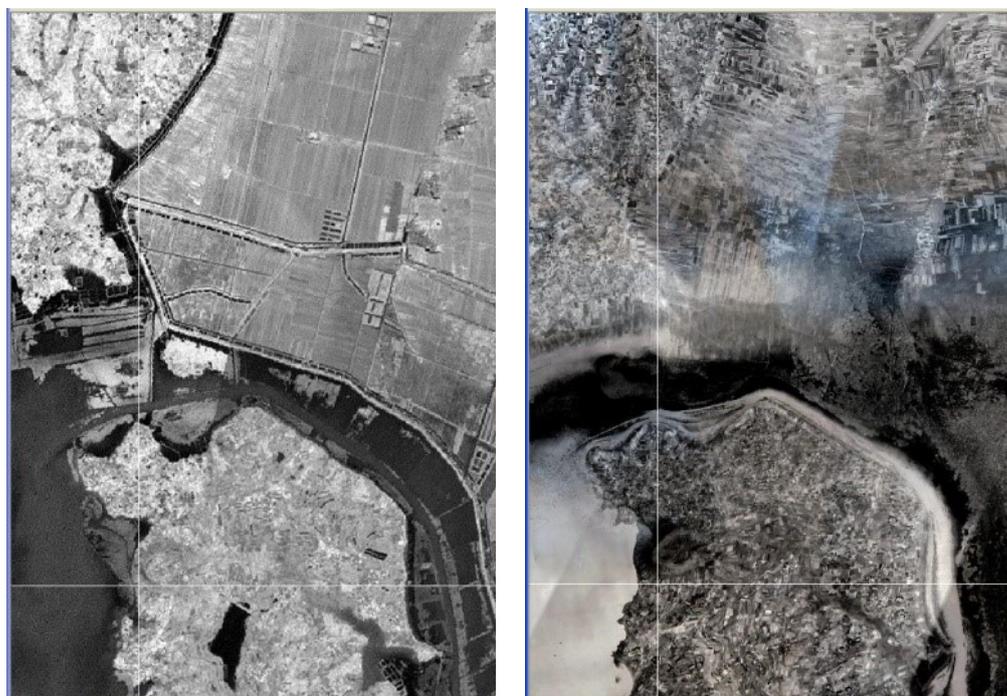


写真7 (左) 中国安徽省の衛星写真 (2000年)

(右) 同所日本軍撮影の衛星写真 (1942年) 〔アメリカ議会図書館蔵〕

〔長澤良太「旧日本軍撮影の空中写真の特徴」地図情報25(3), 2005所収〕

作る必要がなかったわけです。

それで、日本軍撮影の空中写真を探索する必要性を感じるわけですが、地図を作るためだけじゃなくて、偵察に際しても空中写真を撮影しています。例えば第二次世界大戦に日本が参戦する直前にプノンペンからシンガポールまで偵察機を飛ばして、イギリスの艦隊の写真を撮ったというようなケースもあります。

それでアメリカ議会図書館にある中国安徽省の空中写真について検討してみました（写真7）。右が1942年撮影の空中写真のモザイクで、左が今の衛星写真です。衛星写真ではきっちり護岸が整備されて耕地の区画ができています。また山の間には貯水池のようなものが造られているとか、景観の変化がよく分かります。

空中写真からは、地図以上にいろんなこと分かるので本格的な探索を進める必要がありますが、アメリカ議会図書館にプリント写真が2,000枚程度、アメリカ国立公文書館にあるネガのロールでは3万7,000枚画像と多くありません。実際に撮ったものの10分の1もないと思います。ヨーロッパで連合軍がドイツから接収した空中写真が120万枚といわれています。またヨーロッパ戦線で第二次世界大戦のときに連合軍側で撮られた空中写真の数が350万枚です。日本軍も数十万枚は撮ったと思いますが、わずかしかなかったと思います。

外邦図デジタルアーカイブ

もう一つお話ししたいのは「外邦図デジタルアーカイブ」についてです。『東北大学所蔵外邦図目録』（東北大学大学院理学研究科、2003年刊）ができたあと、これを担当した研究者が言い出して、デジタルアーカイブを作り始めました。外邦図は作ってから70年ぐらいたってしまいますから、閲覧すると現物が傷んでいきます。地図の画像をアーカイブにしてネットで見られるようにしたら現物の保存にもいいし、便利ではないかというので、外邦図目録に掲載した書誌データ（地域、縮尺、カバーする範囲の経緯度、測量年、刊行年、測量機関、刊行機関など）をメタデータとするデータベースをかねることになりました。

これは1995年から公開していますが、地図の検索などについて改良を重ねてきました⁵。キーワードだけでなく、各地域の目録や索引図からアプローチするもののほか、「ワールドマップ検索」という楽しい検索法が最近くわまりました。世界地図の上で目標の地域をクリックするやり方です。同時に地図の縮尺も指定しておきますと、図郭の範囲が示されてきて、目標の地図に到達できます。めざす図のタイトルしめすウィンドウが出ますので、それをクリックすると地図の画像が出てきます。さらにクリックすると拡大画像が出て、これはマウスのホイールで自在に拡大縮小ができます。この拡大縮小機能も最近整備されました。別枝先生の引用した図も、これで確認いたしました。

今までスキャンした外邦図の全部について、こうしたワールドマップ検索ができるようにしたいのですが、大きな障害があります。外邦図の中には経緯度が記入されていない地図があって、特に中国についてはたくさんあります。経緯度が入っていれば簡単にGISを使って、ワールドマップ検索が可能になるのですが、なかなかそういう具合にはいきません。経緯度がない地図については、グーグルアースの画像と比較しながら地図の位置を求め、経緯度を決めていくという労力のかかる作業が必要のようです。

それから、お茶大も外邦図コレクションのデジタルアーカイブを作っています。東北大学から発信している外邦図は、基本的に地形図ですが、お茶大では大型の「兵要地誌図」の画像を公開しています。兵要地誌図は、地図上に飛行場適地や上陸地など重要地点を説明付で記入している地図で、中国や東南アジア各地、太平洋地域についても作られていま

5. 「外邦図デジタルアーカイブ」は下記のURLから閲覧できる。

<http://chiri.es.tohoku.ac.jp/~gaihozu/>

す。この場合も伸縮自在のかたちで、大きい地図を見やすく公開しています⁶。

類似の地図画像公開システム

外邦図の公開でおもしろいのは、台湾の中央研究院が公開している「台湾新旧地図対比・台湾堡図」です⁷。台湾では植民地期の初期（20世紀初頭）に「台湾堡図」という2万分の1地形図が作られました。これを全部スキャンしてGoogle Earth（グーグルアース）の上に貼って、伸縮自在にして公開しています。この画面の右上のバーを操作すると、同じ地点について、台湾堡図と空中写真を重ねて100年という時間を隔てた景観を比較することができるというクレーバーで素晴らしいシステムで、僕も外邦図を全部このやり方で公開したいという夢を持っています。

これ以外の海外のサイトでも外邦図やそれに関連する地図を紹介しているものがあります。オーストラリア国立博物館もニューギニアの空中写真で作った外邦図を公開しています。テキサス大学からはすでにお話ししたアメリカ陸軍地図局（AMS）が戦中戦後に世界各地で作った地図を公開しています。

アメリカ議会図書館では、1880年代に中国大陸や朝鮮半島を旅行した日本の陸軍将校が作った手描き原図を収蔵しているという話をしました。実は私どももこれについてデジタルアーカイブを作っていて、ご紹介します⁸。まだ目録からしかアプローチできないのですが、各図を開いていただきますと、将校が歩いたコースの両側を描いた手描き図が出てきます。

こうした図が全部で500枚ぐらいありまして、自分たちで写真撮影したものもあります。アメリカ議会図書館にスキャンを依頼した場合があります。各地図の裏側の隅には大事な書誌データが記入されていますので、これも画像を示しています。広開土王碑文の拓本を日本に最初に持って帰った酒匂景信の自筆の地図もありますから、ご関心の方はご覧いただけたらと思います。日本軍はこうした手描き原図の情報を編集して、朝鮮半島と華北について20万分の1の地図を作って、日清・日露戦争で利用いたします。

外邦図を利用した研究の課題

外邦図は戦後間もない時期には、地図が十分に整備されていない地域の地図資料として使われました。海外での活動に従事する研究者や企業関係者、さらに登山家がお茶大の浅井先生のところで外邦図を閲覧したり、入手したりしたわけです。ただし、他にもいろいろな使い方があると思います。歴史研究とか、地域研究の資料としてということになると、存在がようやく知られてきたところとおもいます。歴史学者の多くはたかが地図というふうには思っていないかもしれませんが、海外では近年地図に対する関心が高まっています。それから方法的にこれからもっと考える必要がありますが、景観や環境変動の資料としても重要だと思います。

立教大学のコレクションの強みというのは、この場合、アジア研究者が現物を使って研究できるということになるかと思えます。デジタルアーカイブで画像が見られるからいいじゃないかという意見があるかもしれませんが、例えばスキャンして細かい分析をしよう

6. 「お茶の水女子大学外邦図コレクション」は下記のURLから閲覧できる。

http://www.lib.ocha.ac.jp/GAIHOZU_Web/Index.html

7. 「台湾新旧地図対比・台湾堡図」は下記のURLで閲覧できる。

http://gissrv5.sinica.edu.tw/GoogleApp/JM20K1904_1.php

8. 正式名称は「アメリカ議会図書館蔵 初期外邦測利用原図データベース」で、下記のURLから閲覧できる。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/earlymap/index.html>

と思ったら、現物があるというのは大きい意義を持ちます。

それからもう1つは、歴史教育、地理教育、環境教育にも使えると思いますが、その場合には学生の知識レベルに合わせた細かい配慮が必要だと思います。

韓国や中国（大陸）の人たちに外邦図を紹介すると、必ずこれは侵略の証拠ということになります。確かにその通りではありますが、それを越えたところでも外邦図を使っていたらいいというのが私の希望です。

東南アジアの場合は、欧米の植民地だった地域の外邦図については、やはり元図の作製過程の研究が不可欠だと思います。植民地地図作製機関の変遷とか、測量史、地図史、さらには帝国史という方向での研究もあるだろうと思います。

それから景観や環境変動の研究、さらには環境史の場合は、外邦図と現代地図や衛星画像を比較することが必要です。千葉大学環境リモートセンシング研究センターのヨサファット・テトオコ・スリ・スマンティヨ先生がジャカルタの1887年以降の都市拡大過程の研究をしており、1927年のデータとして外邦図を利用しています（図3）。もともとオランダが作った地図ですけど、この図があってはじめてジャカルタの拡大に関する時間解像度とでもいえるものが高まって、そのプロセスがよく見えてくることになります。

ヨサファット先生は使う地図の図法のちがいを考慮して、古いものを今の図法に全部合わせるという手間をかけて図を作っています。リモートセンシングの専門家ならではのお仕事です。

時間を超過してしまいましたが、こんなところで終わらせていただきます。ありがとうございました。

上田：どうもありがとうございました。

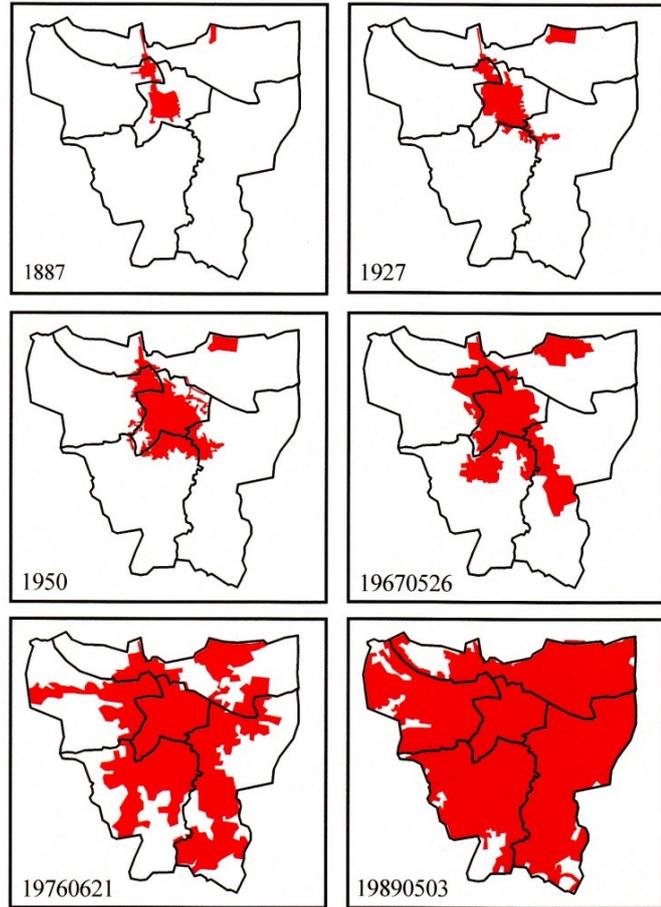


Figure 4. Urbanized area change of Jakarta city in time series

図3 ジャカルタ市街地の拡大

[J.T. Sri Sumantiyo et al. Urban monitoring using former Japanese military maps and remote sensing. 外邦図研究ニューズレター4号、2006年所収]

